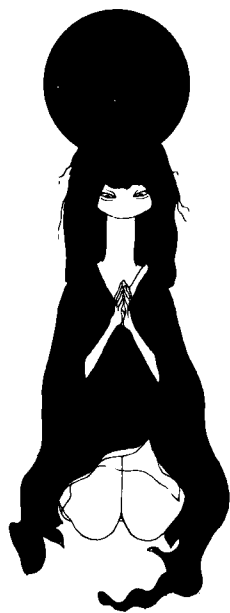


夢野久作全集

1



夢野久作全集 1

一九六九年六月十五日 第一版第一刷発行

一九七四年 月十五日 第一版第六刷発行

編者 中島河太郎・谷川健一 ©杉山龍丸 一九六九年

発行者 竹村 一 発行所 株式会社三一書房 東京都千代田区神田駿河台二の九

郵便番号 一〇一 電話東京 (二九一) 三一三一・五番 振替東京八四一六〇番

印刷所 暁印刷株式会社 製本所 株式会社鈴木製本所

目次

あやかしの鼓	7
夫人探索	44
いなか、の、じけん	47
人の顔	86
死後の恋	92
瓶詰の地獄	108
涙のアリバイ	115
押絵の奇蹟	120
微笑	173
支那米の袋	174
鉄鎚	197
空を飛ぶパラソル	226

復讐
245

卵
266

童貞
270

一足お先に
283

冗談に殺す
320

靈感
334

解題（中島河太郎）
355

解説対談（尾崎秀樹・谷川健二）
361

夢野久作全集
1

あやかしの鼓

私は嬉しい。『あやかしの鼓』の由来を書いていい時機が来たから……。

『あやかし』という名前はこの鼓の胴が世の常の桜や躑躅と違って『緩』になった木目を持つ赤樫で出来ているところからもじったものらしい。同時にこの名称は能楽という『妖怪』という意味にも通っている。

この鼓はまったく鼓の中の妖怪である。皮も胴もかなり新しいものの様に見えて、実は百年ばかり前に出来たものらしいが、これをしかけて打って見ると、ほかの鼓の、あのボンボンと言う明るい音とはまるで違った陰気な、余韻のない……ポ……ポ……ポ……という音を立てる。

この音は今日迄の間に私が知っているだけで、六、七人の生命を呪った。しかもその中の四人は正徳の時代にいた人間であった。皆この鼓の音を聞いたために死を早めたのである。

これは今の世の中では信ぜられぬことであらう。それらの呪われた人々の中で、最近に問題になった三人の変死の模様を取り調べた人々が、その犯人を私——音丸久弥と認めたのは無理もないことである。私はその最後の一人とし

て生き残っているのだから……。

私はお願ひする。私が死んだ後にどなたでもよろしいからこの遺書を世間に発表していただきたい。当世の学問をした人は或は笑われるかも知れぬが、しかし……。

楽器というものの音が、どんなに深く人の心を捉えるものであるかと言うことを、本当に理解しておられる人は私の言葉を信じて下さるであらう。

そう思うと私は胸が一パイになる。

今から百年ばかり前のこと京都に音丸久能という人がいた。

この人はもとさる尊い身分の人の妾腹の子だという事であるが、生まれつき鼓をいじることが好きで、若いうちから皮屋へ行っているいろいろな皮をあつらえ、また材木屋から様々の木を漁って来て鼓を作るのを楽しみにしていた。そのために親からは疎んぜられ、世間からは蔑まれたが、本人はすこしも意としなかった。その後さる町家から妻を迎えてからは、とうとうこれを本職のようにして上つ方に入りをはじめ、自ら鼓の音に因んだ音丸という苗字を名の

るようになった。

久能の出入り先で今大路といふ堂上方の家に綾姫という小鼓に堪能な美人がいた。この姫君はよほどいたづらな性質でいろいろな男に關係したらしく、その時既に隠し子まであったというが、久能は妻子ある身でありながら、いつとなくこの姫君に思いを焦がすようになった揚句、ある時鼓の事よせて人知れず言い寄った。

綾姫は久能にも色よい返事をしたのであった。しかしそれとてもほんの一時のなぐさみであつたらしく、間もなく同じ堂上方で、これも小鼓の上手ときこえた鶴原卿というのへ嫁づくこととなった。

これを聞いた久能は何とも言わなかった。そうしてお興入れの時にお道具の中に数えて下さいと言って自作の鼓を一個さし上げた。

これが後の『あやかしの鼓』であつた。

鶴原家に不吉なことが起こつたのもそれからのことであつた。

綾姫は鶴原家に嫁ついで後その鼓を取り出して打って見ると、尋常と違つた音色が出たので皆驚いた。それは恐ろしく陰気な、けれども静かな美しい音であつた。

綾姫はその後何と思つたか、一室に閉じこもつてこの鼓を夜となく昼となく打っていた。そうして或る朝何の故ともなく自害をして世を早めた。するとそれを苦に病んだものかどうかわからぬが、鶴原卿もその後病氣勝ちになつて、

或る年関東へお使者に行つた帰り途に浜松とかまで来ると血を吐いて落命した。今で言う結核か何かであつたろう。その跡目は卿の弟が継いだそうである。

しかしその鼓を作つた久能も無事では済まなかつた。久能はあとでこの鼓をさし上げたことを心から苦にして或る時鶴原卿の邸内へ忍び入つてこの鼓を取り返そうとすると、生憎その頃召し抱えられた左近という若侍に見つけられて肩先を斬られた。そのまま、久能は鼓を取り得ずに逃げ帰つて間もなく息を引き取つたが、その末期にこんなことを言つた。

「私は私があの方に見すてられて空虚となつた心持ちをあの鼓の音にあらわしたのだ。だから生き生きとした音を出させようとして作つた普通の鼓とは音色が違ふ筈である。私はこれを私の思うた人に打たせて『生きながら死んでゐる私』の心持ちを思い遣つて貰おうと思つたのだ。ちつとも怨んだ心持ちはなかつた。その証拠にはあの鼓の胸を見よ。あれは宝の木と言われた綾模様の木目を持つ赤檜の古材で、日本中に私の鑿しか受けつけない木だ。その上に外側の蒔絵まで宝づくしにしておいた。あれはお公卿様というものが貧乏なものだから、せめてあの方の嫁つがれた家だけでも、お勝手許の御都合がよいようにと祈る心からであつた。それがあんなことにならうとは夢にも思い設けなんだ。誰でもよい、私が死に際のお願ひにあの鼓を取り返して下さらんか。そうして又と役に立たんように打ち潰し

て下さらんか。どうぞどうぞ頼みます」

これが久能の遺言となったが、誰も鶴原家に鼓を取り返しに行く者なぞなかった。それどころでなく変死であったので、ごく秘密に久能の死骸を葬った。

しかしこの遺言はいつとなく噂となって世間に広まり、果ては鶴原家の耳にも入るようになった。鶴原家ではそれからその鼓をソックリ箱に藏めて、土蔵の奥に秘めて虫干しの時にも出さないようにした。それと一緒に誰言うとか『あやかしの鼓』という名がついて、その箱の蓋を開いただけでも怪しいことがある……その代りこの鼓を持ち伝えてさえいれば家の中に金が湧くと言ひ伝えられた。そのおかげかどうかわからぬが、その後の鶴原家には別に変ったこともなく却ってだんだんと勝手向きもよくなつて維新後は子爵を授けられたが、大正の初めになると京都を引き上げて東京の東中野に宏大な邸を構えた。

これと反対に綾姫の里方の今大路家はあまり合せがよくなかった。綾姫が鶴原家に嫁つたあとで血統が絶えそうになったが綾姫の隠し子があつたのを探し出して表向きを都合よくしてやつと跡目を立てたような始末であつた。しかしその後次第に零落してしまつて維新後はどうなつたか、わからなくなつてゐるという。

こうして『あやかしの鼓』に關係のある二軒の家が一軒は榮え一軒は落ちぶれてゐる一方に、音久能の子の久伯

と、その子の久意は久能のあとを継いで鼓いじりを商売にしてどうにか暮しているにいた。けれども二人とも久能の遺言を本氣に受けて鶴原家からアヤカシの鼓を引き取ろうと言うようなことはしなかった。

この久能の孫の久意が私の父であつた。

私の父は京都にゐる時分から鼓の修繕や仲買見たようなことをやつてゐた。けれども手職が出来たらしい割りにお客の取りつきがわるく、最初に生まれた男の子の久禄というのは生涯音信不通で、六ツの年に他家へ遣るといふ有様であつた。これを東京の九段におられる能小鼓の名人で高林弥九郎という人を見かねて東京に呼び寄せ、牛込の筑土八幡の近くに小さな家を借りて住まわせて下すつたので父はやつと息を吐いたと言ふ事である。

しかし明治三十六年になつて母が私を生み残して死ぬ、どうしたものか父は仕事を怠け始めて貸本ばかり読むようになった。それから大正三年の夏に脊髄病に罹つて大正五年の秋まで足かけ三年の間私に介抱されたあげく肺炎で死んだ。その時が五十五であつた。

その死ぬすこし前のことであつた。

私がお復習を済ましてから九段の老先生から貸りて来た『近世説美少年録』という本を読んできかせようとすると父は、

「ちよつと待て、今日はおれが面白い話をしてきかせる」と言いながらポツポツと話し出した。それが『アヤカシ

の鼓』の由来で私にとっては全く初耳の話であった。

……ところで……

と父は白湯を一パイ飲んで話し続けた。

「……実はおれもこの話をあまり本気にしなかった。名高い職人にはよくそんな因縁はなしがくつついているものだから……東京に来て鶴原家がどこにあるやら気もつかず、また考えもしなかった。

すると今から三年ばかり前の春のこと、朝早くおれが表を掃いていると二十歳ばかりの若い美しい、いからさんが来て、この鼓の調子を出してくれと言いながら綺麗な皮と胴を出した。おれは何気なく受け取って見ると驚いた。胴の模様は宝づくしで材木は美事な赤樫だ。話にきいた『あやかしの鼓』に違いないのだ。そのはいからさんはその時こんなことを言った。

『私は中野の鶴原家のもので九段の高林先生のところで、お稽古を願っているものだがこの鼓がうちにあったから出して打って見たんだけど、どうしても音が出ない。何でもよっぽどいい鼓だと言ひ伝えられているのだから、音がでない筈はないと思うのだけど』

と言うんだ。おれは試しに、

『へエ。その言い伝えとはどんなことで……』

と引かけて見たが、奥さんはまだ鶴原家に来て間もないせいか、詳しいことは知らないらしかった。ただ、『赤ん坊のような名前だったと思います』

と言ったのでおれはいよいよそれに違いないと思った。おれはその鼓を一先ず預ることにして別嬪さんをかえした。そのあとですぐに仕かけて打って見ると……おれは願え上がった。これはただの鼓じゃない。祖父さんの久能の遺言は本当であった。鶴原家に崇るといふのも嘘じゃないと思つた。

とは言うものの鶴原家がこの鼓を売るわけはないし、どんなに考えてもこつちのものにする工夫が付かなかったの、おれはそのあくる日中野の鶴原家に鼓を持って行つて奥さんに会つてこんな嘘をついた。

『この鼓はどうもお役に立ちそうに思えません。第一長いこと打たずにお仕舞い置きになっておりましたので皮が駄目になっております。胴もお見かけはまことに結構に出来ておりますが、材が樫で御座いますから、ちよつと音が出かねます。多分これは昔の御縁組みの時のお飾り道具にお用い遊ばしたものと存じますが……その証拠には手擦があまり御座いませんで……お模様も宝づくしで御座いますから……』

これは家業の一番むづかしいところで、こつちの名を捨ててお向う様のおためを思わねばならぬ時のほか、めつたについてはならぬ嘘なのだ。ところが若い奥さんはサモ満足そうにうなずいたよ。

『妾もおおかた、そんな事だろうと思つたヨ。妾の手がわるいのかと思つていたけど、それを聞いて安心しました。』

じゃ大切に仕舞って置きましょう』

って言って笑ってね。十円札を一枚、無理に包んでくれたよ。それから間もなく俺は脊髄にかかって仕事が出来なくなつたし、その奥さんも別に仕事を持って来なかった。けれども俺は何となく気になるから、その後九段へ何うたんびに内弟子の連中から鶴原家の様子を聞き集めて見る……どうだ……。

鶴原の子爵様というのは元来、お家柄自慢の気の小さい人で、なかなかお嫁さんが定まらないために三十まで独身でいた位だったそうだが、その前の年の暮にチョットした用事で大阪へ行くと、世間で言う魔がさしたとでも言うのだらう、何処で見初めたものか今の奥さんに思いつかれて夢中になったらしく、とうとう子爵家へ引っぱり込んでしまった。するとその奥さんの素性がわからないと言うので、親類一統から義絶されたあげく、京都におれなくなつて、東京の中野に移転して来たものだった。

ところでそれはまあいいとしてその奥さんは、名前をたしかツル子さんと言つたつが……東京へ越して来て鼓のお稽古を始めると間もなく、子爵様の留守の間に、お付きの女中が青くなつて止めるのもきかないで『あやかしの鼓』を出して打つて見たものだ。それをあとから子爵様が聞いてヒドク叱つたそうだが、それを気に病んだものか子爵様は間もなく疳が昂ぶり出して座敷牢みたようなものの中へ入れられてしまった。それからツル子夫人は中野の邸

を売り払つて麻布の筈町に病室を兼ねた小さな家を建てて住んだものだが、そうして病人の介抱をしいしい若先生のところへお稽古に来ていゝうちに子爵様はどうとう糸のよりに、瘦せ細つて今年の春亡くなつてしまった。

そうすると鶴原の未亡人は、そのあとへ、自分の甥とかに当る若い男を連れて来て跡目にしようとしたが、鶴原の親類はみんなこの仕打ちを憤つてしまつて、お上に願つて華族の名前を除くと言つて騒いでいる。おまけに若未亡人のツル子さんについても、よくない噂ばかり……ドッチにしても鶴原家のあとは断絶^{たえ}たと同様になつてしまった。

おれは誰にも言わないが、これはあの『あやかしの鼓』のせいだと思ふ。そうして、それにつけておれはこの頃から決心をした。お前は俺の子だけあつて鼓のいじり方があるうとくわかつてゐる。今にきつと打てるようになると思ふ。

けれども俺はお前に言つて置く。お前はこれから後、忘れても鼓をいじつてはいけないぞ。これは俺の御幣かつぎじゃない。鼓をいじると自然い道具が欲しくなる。そうしておしまいいにはキットあの鼓に心を惹かされるようになるから言うんだ。あのアヤカシの鼓は鼓作りの奥儀をあらわしたものだからナ……。

そうなつたらお前は運の尽きだ。あの鼓の音をきいて妙な気もちにならないものはないのだから。狂人になるか変人になるかどっちかだ。

お前は勉強をしてほかの商売人か役人かになって東京からずっと離れたところへ行け。鶴原家へ近寄らないようにしろ。

おれはこのごろこの事ばかり気にしていた。いづれ老生にもよくお願いして置くつもりだが、お前がその気にならなければ何にもならない。

いいか……忘れるな……」

私はお伽話でも聞くような気になってこの話をきいていた。しかし別段鼓打ちになろうなぞとは思わなかったから、温和しくうなずいてばかりいた。

父は安心したらしかった。

その年の秋に父が死んで九段の老先生の処へ引き取られると、間もなく私は丸々と肥って元氣よく富士見町小学校へ通い続けた。『あやかしの鼓』の話などは思い出しもしなかった。

老先生は小柄な、日に焼けた、眼の光りの黒いお爺さんであった。年はその時が六十一で還暦のお祝いがその春にある筈であったのが、思いがけなく養子の若先生が家出をされたので、その騒ぎのためにおやめになった。

若先生は名を靖二郎と言った。私は会ったことがないが老先生と反対にデブプリと肥った気の優しい人で、鼓の音ジメのよかった事、東京や京阪で催しのある毎に一流の芸

者がわざわざ聞きに来た位であったという。家出された時が二十歳であったが着のみのままで遺書などもなく、また前後に心当りになるような気配もなかったのので探す方では途方に暮れた。一方に氣の早い内弟子はもう後釜をねらって暗闘を始めているらしい事なぞをおしゃべりの女中からきいた。

「あなたが大方あと継ぎにおなりになるんでしょ」なぞとその女中は言った。

しかし老先生は私に鼓打ちになれなぞとは一口も言われなかった。ただ無暗に可愛がって下さるばかりであった。

けれども家が家だけに鼓の音は朝から晩まで引っぱりなしにきこえた。そのボンボンボンボンという音をウンザリする程きかされているうちに私の耳は子供ながら肥えて来た。初めいい音だと思ったのがだんだんつまらなく思われるようになった。内弟子の中で一番上手だという者の鼓の音メはほかの誰のよりもまん丸くて、キレイで、品がよかったがそれでも私はただ美しいとしか感じなかった。もうすこし氣高い……神様のように静かな……又は幽霊の声のように氣味のわるい鼓の音はないものか知らん……などと空想した。

私は老先生の鼓が聞きたくてたまらなくなった。

しかし老先生が打たれる時は舞台台出稽古の時ばかりで、うちでは滅多に鼓を持たれなかった。一方に私も学校へ通っていたので、高林家へ来て暫くの間は一度も老先生の鼓

をきくことが出来なかった。ただ一度正月のお稽古初めの時に吉例の何とか言うものを打たれたそうであるが、その時は生憎お客様のお使いをしていたために聞き損ねた。

こうして一夜明けた十六の年の春、高等二年の卒業免状を持って九段に帰ると、私はすぐ裏二階の老先生の処へ持つて行つてお眼にかけた。すると向うむきになって朱筆で何か書いておられた老先生はふり返つてニコリしながら「ウム。よしよし」

とおっしゃつて茶托に干菓子を山盛りにして下さつた。それをポツポツ喰べている私の顔を老先生はニコニコして見ておられたが、やがて床の間の横の袋戸から古ぼけた鼓を一挺出して打ち始められた。

そのムムム〇〇〇という音をきいた時、私はその気高さに打たれて髪の毛がゾーッとした。何だか優しいお母さんに静かに言い聞かされているような気もちになつて胸が一パイになった。

「どうだ鼓を習わないか」

と老先生は真白な義歯を見せて笑われた。

「ハイ、教えて下さい」

と私はすぐに答えた。そうしてその日から安っぽい稽古鼓で『三ツ地』や『続け』の手を習つた。

けれども私の鼓の評判はよくなかつた。第一調子が出ないし、間や呼吸なぞもなつていないと言つて内弟子からい

つも叱られた。

「大飯を喰うから頭が半間になるんだ。おさんどん見たいに頬ベタばかり赤くしゃがつて……」

なぞと寄つてたかつて笑い物にした。けれども私はちつとも苦にならなかつた。——鼓打ちなんぞにならなくてもいい。老先生が死なれるまで介抱をして御恩報じをしたら、あとは坊主になつて日本中を旅行して遣らう——なぞと思つていたから、なおのこと大飯を喰つて元気を養つた。

その年が過ぎて翌年の春のおしまいがけになると、若先生はいよいよ亡くなられたことにきまつたので、ごく内輪でお菓子とお茶ばかりの御法事が老先生のお室であつた。その席上で老先生の親類らしい胡麻塩のおやし

が、「早く御養子でもなすつては……」

と言つたら並んでいる内弟子の三、四人が一時に私の方を見た。老先生は苦笑いをされた。

「サア。靖（若先生）のあとは、ちょっとありませんね。ドングリばかりで……」

とみんなの顔を一渡り見られた。内弟子はみんな真赤になつた。

私はこの時急に若先生に会つて見たくなつた。——きつと何処かに生きておられるに違いない。そうして鼓を打つておられるような気がする。その音がききたいな——と夢のようなことを考えながら、老先生のうしろにある仏壇のお燈明の間に白く光っている若先生のお位牌を見ていると、

不意に、

「その久弥さんはどうです」

と胡麻塩おやじが又出しやばって言ったので私は胸がドキドキとした。

「イヤ、これは言わば『鼓の啞』でね……調子がちつとも出ないたちです。生涯鳴らないかも知れません。こんなのは昔から滅多にいないものですがな」と言いながら私の頭を撫でられた。私もとうとう真赤になった。

「その児はものになりましようか」

と内弟子の中の兄さん株が言った。吹き出したものもあった。

「物になった時は名人だよ」

と老先生は落ちついて言われた。みんなポカンとした顔になった。

みんなが裏二階を降りると老先生は私に取っときの羊羹を出して下さった。そうして長い煙管で刻煙草を吸いながらこんなことを言われた。

「お前はなぜ鼓の調子を出さないのだえ。いい音が出せるのに調子紙を貼ったり剥がしたりして音色を消しているが、どうしてお前はあんなことするのだえ」

私はおめず臆せず答えた。

「僕の好きな鼓がないんです。どの鼓もみんな鳴り過ぎるんです」

「フーン」

と老先生はすこし御機嫌がわるいらしく、白い煙を一服黒い天井の方へ吹き出された。

「じゃどんな音色が好きなんだ」

「どの鼓でもボンボンボンって『ン』の字を言うから嫌なんです。ボンボンの『ン』の字を言わない……ポ……ポ……ポ……ポ……という響のない……静かな音を出す鼓が欲しいんです」

「……フーム……おれの鼓はどうだえ」

「好きです僕は……。けれどもポオ……ポオ……ポオ……と言います。その『オ』の字も出ない方がいいと思うんです」

老先生は又天井を向いてプーッと煙を吹きながら、眼をシヨボシヨボと閉じたり開けたりされた。

「先生」と私はいくらか調子に乗って言った。

「鶴原様のところに名高い鼓があるそうですが、あれを借りてはいけないうまいしょうか」

「とんでもない」

と老先生は私の顔を見られた。私はこの時ほど嚴重な老先生の顔を見たことがなかった。私はうなだれて黙り込んだ。

「あの鼓を出すにあの家に不吉なことがあると言うじやないか。たとい嘘にしろ他人の家に災難があるようなことを望むものじゃないぞ。いいか。氣に入った鼓がなければ生